

1	言葉
言葉の力をつけよう（音読1年③） 〔古典落語「時そば」〕	
名	前

★古典落語は、寄席といわれるステージで、特別な音響や、舞台装置、衣装や道具、音曲（三味線などの楽器や歌）などをなるべく使わず、たった一人で、身振り（みぶり）と語り（かた）で演じます。そのため、話し方や間の取り方が重要になってきます。最初は読みにくいかもしれませんが、毎日練習すれば、すらすらと読めるようになり、音読の楽しさを味わえます。次の「時そば」は、古典落語の有名なものです。音読に挑戦してみましょう。

やってみよう

昔は夜になりますと、天秤棒（てんびんぼう）で荷（に）をかついだそば屋が、江戸の町々を流したものでございます。
ある晩、屋台（やたい）で一人の男がそばを注文しました。

男1 「出てきたそばを受け取って」 おまえの所（ところ）はいい 井（い）を使（つか）っているね。ものは器（うつわ）で食べさせるといふけれど、器（うつわ）がよければ多少中身はますぐっても・・・（つゆを一口飲んで）おっ、うまい。いいだしをつかっているねえ。（ふうふうふきながらそばをすすり込むしぐさで）そばも細（こ）くっていいねえ。江戸前（えどまえ）のそばはこうでなくっちゃいけない。ああ、うまかった。いくらだいい。」

そば屋 「十六文いただきます。」

男1 「手を出しな。」

そば屋 「へえ（両手を出して）、これへ願（ねが）います。」

男1 「一文（いちもん）ずつお金を出すように」 ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ、・・・何刻（なんどき）だい。」

そば屋 「へえ、九つ（ここの）で。」

男1 「十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。ごちそうさま。」

勘定（かんじよう）をはらって、そのまんま、ぶいっ（ぶい）と行ってしまいました。さて、これを少々（せうしょう）のんびりした男が見（み）ておりまして、

男2

「べらべらお世辞（せじ）ばかり並（なら）べて、嫌（いや）な男だ。なんだい、あいつは。『いくらだい。』って、そばは十六文（き）に決（き）まっているじゃないか。そのうえ、子どもみたいな数え方（かずえかた）するなんて。『ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ・・・何刻（なんどき）だい。』待（まち）てよ。あの男、変（へん）なところで刻（とき）をききやがったな。なにもあんなところで刻（とき）をきくことはねえじゃねえか。（数（かず）えるまねをして）『ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、なな、やあ何刻（なんどき）だい。』『へえ、九つ（ここの）。』『十、十一、十二、十三、十四、十五、十六。』・・・あれっ、おかしいな。もう一回（いっぺん）やってみよう。いつ、むう、なな、やあ、何刻（なんどき）だい。九つ。十、十一、十二、十三・・・あっ、あいつ、うまくごまかしたんだ、よし、おれもやってみよう。」

この男、早くやってみたくてしょうがなくて、わざわざ細かい銭（ぜに）を用意（ようい）して、明（あ）くる晩、早（はや）目（め）に出（で）かけました。やってきたそば屋（そばや）を呼び止め、そばを頼（たの）んで食べ始めるのですが、これがまた、とんでもないそばで・・・。

この後の話は、どうなると思いますか。男2は、「何刻（なんどき）だい」というタイミングを間違（まちが）えてしまい、結局（けつぎ）四（よ）文（もん）損（そん）をしてしまうという笑い話（わらいばなし）です。